

三重県における野生ニホンザルの分布と保護・管理の現状

室山泰之

京都大学霊長類研究所

はじめに

近畿地方には、全国でも最大規模のニホンザル個体群が広がっている。この個体群は、1923年の長谷部の調査では近畿地方から中部・北陸・中国地方東部まで広がっていたが、1978年の環境庁の調査では、さらに東側の関東甲信越地域にまで及ぶことが明らかとなり、和歌山、奈良、三重の三県を含む紀伊半島と琵琶湖周辺に連続した分布が認められる(小金沢, 1995)。

近年、全国的にニホンザルによる農作物被害(猿害)が増加しているが、近畿地方も例外ではない。現在もっとも広範に行なわれている対策は有害鳥獣駆除であるが、その駆除数は全国的に年々増加しているにもかかわらず(環境庁資料)、明確な被害軽減が報告されている地域はほとんどない(揚妻, 1999)。

その一方、限定された範囲での集中的な捕獲による集団の消滅や、個体群の縮小あるいは絶滅の事例は若干報告されており(全国農業改良普及協会, 1981; 佐野, 1994)、捕獲が個体群の存続可能性に与えている影響は、地域によっては少なくないと考えられる。個体群を維持しつつ有効な被害対策を実施するために、個体群の生息状況や生息環境に関する資料を早急に収集し、地域の現状に則した保護・管理計画を策定していくことが喫緊の課題となっている。

この報告では、現時点における三重県のニホンザルの分布と保護・管理の現状を、既存の調査資料とアンケート調査および聞き取り調査の

結果から明らかにすることを目的とした。また、現在収集可能な資料から、農林業被害とその対策の現状や各地で抱える固有の問題などをできるだけ指摘し、今後三重県でニホンザルの保護・管理を進めていく上での基礎となる材料を提供することを試みた。なおこの報告は、室山らによる別報(室山ほか, 1999)と一部重複することをあらかじめお断りする。

農林業被害や個体群分布に関する資料提供などさまざまなご協力をいただいた三重県環境安全部自然環境課と(株)野生動物保護管理事務所に感謝する。なおこの報告は、ニホンザル保護管理のためのワーキンググループへの環境事業団地球環境基金助成金を一部用いて作成した。

方法

ニホンザルの群れの生息地域、ニホンザルによる農林作物被害および被害対策に関する情報は以下に述べる方法で収集した。分布情報は、三重県環境安全部自然環境課が1997年度から行なった野生生物生息実態調査(委託先:(株)野生動物保護管理事務所)の一部として行なわれたアンケート調査、および室山が行なった現地踏査に基づいた。アンケートは、県内市町村、森林組合、生産森林組合、営林署、農協、椎茸農協、鳥獣保護員、自然観察指導員、自然環境保全指導員、山小屋を対象に537通送付し、327通の回答を得た(回収率61%)。農林作物被害および被害対策については、自然環境課の資料から、被害発生地域、被害金額、被害

面積、有害鳥獣駆除による捕獲頭数、および被害作物について情報を収集した。

収集した群れの生息情報を、標準地域メッシュの第2次地域区画の縦横をそれぞれ2等分した、1辺が約5kmのメッシュ（セル）に図化した（図1）。現在の分布状況と1978年における分布状況を比較するために、環境庁が1978年に各都道府県に委託して行なった第2回自然環境保全基礎調査の結果（環境庁，1979）も同様に図化した（図1）。収集した情報に基づいて、

- ① 分布・生息状況
 - ② 農林作物被害の状況と被害対策
 - ③ 保護・管理上の問題点
 - ④ 今後の動向
- の4点についてまとめた。

結果と考察

(1) 分布・生息状況

三重県に生息するニホンザルはすべて、中部地方から近畿地方にかけて広がる中部近畿個体群に含まれる（室山ほか，1999）。この個体群は、近畿地方全域にまたがる大きな個体群である。三重県内の分布は1978年当時から広範囲に連続していたが、1998年の調査では、海岸部や

平野部の集落への分布の拡大傾向が認められた（図1）。セル数は126から163と約1.3倍に増加した。

地域別にみると北中部で農地や集落周辺への進出がかなり進んだことが推測される。しかしながら、分布の拡大が集団数や個体数の増加を示しているという明確な資料は得られなかった。一方、内陸山間部の森林では集団を目撃することが少なくなったという聞き取り情報もあり、山間地域あるいは中山間地域から集落周辺へと分布が変化してきた可能性や、生息密度が低下している可能性も考えられる。

(2) 農林作物被害の状況と被害対策

農林作物に対する被害は森林に隣接するほとんどの集落に及んでおり、一部地域では集落周辺や農地への進出に伴う住居環境被害も報告されはじめている。被害発生年代は、早い地域では60年代からすでに発生しているが、多くの地域では80年代から90年代に入ってから発生している。早くから被害の発生していた地域での被害の恒常化と深刻化がみられる一方、最近分布の拡大が認められる地域での被

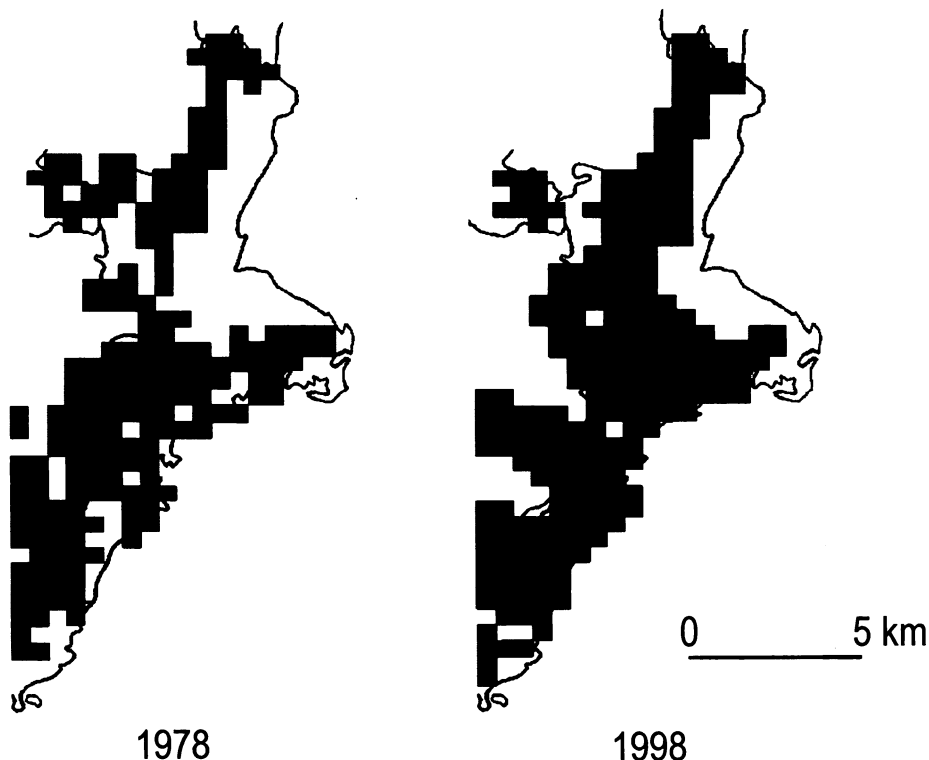


図1 三重県における1978年と現在(1998年)のニホンザルの分布

害地域の拡大が起こっている。また、水稻や転作作物である麦など大面積に栽培される作物への被害が見られる地域では、農地周辺への集団の定着と被害の恒常化が認められた。

とくに農林作物被害が著しいのは、藤原町や北勢町などを中心とする北勢地域、亀山市から上野市・青山町を含む伊賀上野地域、南勢町から飯高町に広がる南勢・飯南地域、さらに南の尾鷲・熊野地域である。被害面積は1988年以降毎年増加しており、1988年には70.9haであったものが、1991年には372.8ha、1994年には1,489ha、1996年には3,242haと報告されている。被害品目は、果樹、野菜、水稻などの農産物のほかに、シイタケなどの林産物もあり、被害金額も多い。また、統計には現われないが、聞き取り調査によると中山間地域での自家消費作物への被害も恒常化していることがうかがわれる。

被害対策としては、果樹栽培地域やシイタケ栽培地域での電気柵事業などが行なわれているが、被害の著しい地域での主要な対策は大型檻や銃器による有害鳥獣駆除である。三重県は全国有数の駆除実施県であり、捕獲数は80年代前半より増加し、最近5年間（平成5～9年度）で3,000頭以上捕獲している。全市町村数(68)の16%を占める11市町村がこの5年間で各々100頭以上を捕獲しており、それらの11市町村を合計すると2,100頭(72%)以上捕獲している。1979年に100頭が捕獲され、その後集団が生息しなくなった島ヶ原村の例もあることから（佐野, 1994）、狭い範囲に高い捕獲圧をかけることは、地域個体群の縮小・消滅を招く危険性が高いことが推測される。

(3) 保護・管理上の問題点

三重県では、この20年の間に集落周辺や農地あるいは海岸部への分布の拡大が起こったと推測される。紀伊半島中心部は、和歌山県境に自然林が多少残ってはいるものの、スギ・ヒノキの植林地率の高い地域である（環境庁植生図）。植林地面積は60年代以降の拡大造林によって急速に広がったと考えられる（農林水産省林業統計）。奈良県や和歌山県とは異なり、三重県では内陸部でのニホンザルの分布縮小

は明確ではないが、生息密度の低下の兆候はみられている。集落周辺や農地へと分布を拡大した集団は、地元住民との軋轢から有害鳥獣駆除等の処置によって排除されることが多い。このまま内陸部から集落周辺へと分布の変化が起こり続ければ、三重県を含む紀伊半島の大きな個体群が大幅に縮小あるいは分断される可能性は否定できない。

農作物被害が報告されている集団の行動圏は、攪乱の少ない地域に生息する集団に比べかなり大きくなることが、いくつかの地域で報告されている（愛知県, 1994；室山, 未発表）。また、分布の拡大はかならずしも個体数増加や群れ数増加を反映していないことも示唆されている（大井, 1994；渡邊, 1995）。したがって、現段階で三重県でみられている集落周辺や農地への分布拡大は、その地域での個体数の増加を意味していると結論付けることはできない。分布拡大地域での集団の密度や行動圏の調査と内陸部の分布および生息実態調査が早急に必要である。

(4) 今後の動向

三重県では1997年度から行なわれている野生生物生息実態調査が1999年度で終了するため、今後保護管理計画の策定が期待されている。しかしながら、前述したようにニホンザルにとって好適と考えられる生息環境は大部分の地域で消失しており、そのような地域では、生息していないか、あるいはかなり低い密度で生息していると推測される。したがって、三重県ではコアエリアとなるべき地域の選定は困難であり、国内の先行地域で行なわれているようなゾーニングを柱とする保護管理計画の実現は現実的ではない（栃木県, 1997；千葉県, 1998）。個体群を維持しつつ被害を軽減するためには、徹底した被害管理を行ないながら、それと並行して大規模な生息地回復事業を進める必要があるだろう。

三重県では、里付近に定着して農作物に多少なりとも依存して生活している、いわゆる「里のサル」がニホンザル個体群の大部分を占めると推測される。このような状況は、おそらく近畿から中国あるいは四国・九州など

比較的古くから人為による環境改変が行なわれてきた地域に共通すると考えられる。いま必要とされていることは、このような地域での保護や管理のあり方を、少しずつ前に進みながら模索することだといえるだろう。

参考文献

揚妻直樹, 1999. 野生生物の保護管理と霊長類学. 『霊長類学を学ぶ人のために』. 西田利貞・上原重男編, pp. 300-326. 世界思想社, 京都.

愛知県, 1994. 愛知県内のニホンザルの現状. 愛知県農地林務部自然保護課, 204pp.

千葉県, 1998. 千葉県野生猿保護管理計画. 千葉県, 26pp, 千葉.

小金沢正昭, 1995. 地理情報システムによるニホンザル地域個体群の抽出と孤立度. 霊長類研究, 11:59-66.

室山泰之・鳥居春己・前川慎吾, 1999. 近畿地方における野生ニホンザルの分布と保護・管理の現状. ワイルドライフ・フォーラム, 5: 1-15.

大井徹, 1994. 森林の保全とニホンザルの保護管理. 森林科学, 11:43-49.

佐野明, 1994. 三重県島ヶ原村の猿害に関する聞き取り調査-全数駆除から14年後の現状-. 森林防疫, 43:207-209.

社団法人全国農業改良普及協会, 1981. 島ヶ原村における猿害対策 -その経過と成果-. 社団法人全国農業改良普及協会普及情報センター, 32pp.

栃木県, 1997. 日光・今市地域におけるニホンザル保護管理計画. 栃木県林務部, 39pp, 栃木.

渡邊邦夫, 1995. 地域における野生ニホンザルの保護管理の問題点と今後の課題. 霊長類研究, 11:47-58.